

ミクロ・マクロ経済学の 授業研究：2001 - 2003年度

山田 久 所員・経済経営学部教授

はじめに

近年の経済学科受験者数の減少や、少子化などによる今後の大学の存続に関わる危機的な状況を考えれば、経済学科では経済学の教育法や教授法について今まで以上に十分吟味し改善する必要がある。受験生の減少とともに、入試方法の多様化などによって学生の基礎学力のレベルに大きなバラツキが生じ、また企業を含めた社会が即戦力としての人材を求めている現実を考えると、今後の経済学科の新入生に、経済学専攻の学生として必要な一定の経済学の基礎を、いかに効率よく教え、興味を持たせて4年間の勉学の動機付けをさせるかということを改めて研究する必要がある。その一環として、2001年度に和光大学総合文化研究所の共同研究プロジェクトとして「経済学教育研究会」を発足させた。その成果の一部は、以下のような論文・著作として発表している。

山田 久「ミクロ経済学とマクロ経済学の教育研究」『東西南北2003』

山田 久「ミクロ・マクロ経済学の授業研究：2001 - 2002年度」『和光経済』、
Vol.35 No.2.3

小林弘明「環境経済論の概要と学部での授業設計について」『和光経済』、
Vol.35 No.2.3

山田 久「ミクロ・マクロ経済学の授業研究：2003年度」『和光経済』、
Vol.36 No.3

伊東達夫「『経済学史』の授業方法に関わって」『和光経済』、Vol.36 No.3

小林弘明『食品流通』実教出版、2004年、第2章「経済活動と食料」執筆

岩間剛一『資源開発プロジェクトの経済工学と環境問題』とりい書房、2004
年3月

日本経済は1990年代初期のバブル崩壊後、長期にわたる景気の低迷に直面しているが、経済社会の国際化・グローバル化は着実に進んでおり、さらに情報技術の進展や金融自由化に代表される経済諸制度の改変などにより、経済システム自体はますます複雑化している。現実の経済・社会を正しく理解するためには、「経済学の知識」や「経済学的なものの見方」を身につけることが必要である。経済政策や経済政策が経済社会に与える影響を理解するためにも、多くの人々が経済学を学ぶことが大事である。また、廃棄物処理に関わる問題、地球温暖化などいわゆる環境問題などへの関心も高まっているので、経済学的なものの見方はますます重要になっている。企業社会や労働市場の動向など、経済・社会を支えるヒトの面に関しては、転職機会の増加や能力給の導入など、これまでにない流動的な労働力市場が形成されつつある。かつて大きな役割を担っていた企業内教育やOJTの比率が低下し、今後は自ら自己の人的資本により多く投資する人材が求められる。パソコンや経済学などの一般的基礎理論を学ぶために、多くの社会人が様々な講座や研修会などに参加していることは、自らが人的資本に投資して、複雑化する経済・社会システムを理解し、労働市場における自己の価値を高めたいと考えているからである。また多くのやさしいと銘打った「経済学解説書」や「新聞の経済記事を読むための経済書」等が数多く出版され、中にはベストセラーになるものもあるのは、「経済学に対するニーズ」が存在しているからである。今後の大学の経済学部・経済学科は、「経済・経済学のわかる社会人」の育成に力を入れることが重要であると考えられる。

「ミクロ経済学」と「マクロ経済学」の授業研究について

経済学科の「ミクロ経済学（以下ミクロ）」と「マクロ経済学（以下マクロ）」は1年次の必修科目であり、経済学の基礎科目であるという点でも授業研究の糸口としては最適であると考えられる。

2001年度から2003年度の3年間にわたって、経済学科のミクロとマクロの授業を利用して、

1. ミクロ・マクロ経済学の基礎として、どれだけのことを教えるべきか、
2. いかにより効率的に教えるか、
3. 授業のスタイル、内容についてはどうあるべきか、

などの授業研究を行った。本年度の2004年度に関しても同様の観点から授業研究を行っている最中である。

2003年度からミクロとマクロの授業はそれぞれ2クラス編成になり、よりいっそうの少人数教育を行うことが出来るようになった。また経済学部全体の学生定員数も本来の定員数に戻ったことで、2001度、2002年度と比べると学生数も減少している。特に、ミクロとマクロの1クラスあたりの受講学生数は大幅に減少した。経済学の基礎を学習する上で、ある程度理想的な環境ができあがりつつあると思われる。2003年度以降のクラス編成については、学籍番号の奇数と偶数によって区別されている。再履修する学生も同様に学籍番号の奇数と偶数によって受講クラスが決定される。筆者の担当は奇数クラスで、ミクロ、マクロともに学籍番号が奇数の学生を対象としている。2003年度のクラスの新生は102名。再履修者を含めると、ミクロで134名、マクロで124名。2004年度のクラスの新生は90名。再履修者を含めると、ミクロで123名。マクロで130名である。

2001年度から2003年度に関しては、教育効果の向上を図るために、ミクロ・マクロともに原則として毎週宿題を課した。ミクロは前期10回、後期11回で合計21回。マクロは前期10回、後期10回で合計20回。試験は前期末試験(学期末)と後期末試験(学年末)の2回、他にミクロ、マクロでそれぞれ数回の小テストを行った。両科目とも宿題のテーマはその日の授業の復習を中心としている。翌週の授業開始直前に宿題を提出させ、授業の前半で宿題の解答と解説を行った。その後、授業を進め授業の後半の内容を再び次の週の宿題としてハンドアウトし、翌週の授業開始直前に再び提出させた。宿題を毎週提出させかつ保存させるために宿題のプリントは2部ずつ配布した。(実際にはB4の用紙に両面印刷し、真ん中で切って学生が各自2部にする。)1部は宿題としての提出用、もう1部は各自の保存用である。

授業運営に関わって2003年度途中から大きく変わりはじめ、2004年度からは授業に積極的に、マイクロソフト社のパワーポイントを取り入れた。(パワーポイントの使用状況や配布する資料については本稿の後段で解説する。)受講生が130名程度に減少したことから、教室でパワーポイントをプロジェクターでスクリーンに映しても十分判読可能で、視覚的には問題がなく、教室は受講学生がノートをとれるぐらいの明るさを確保できる。パワーポイントを使用することによって、文字や式や図を正確に表すことができ、従来は

板書していた講義内容をあらかじめプリントして授業前に配布することができる。毎回の授業で配布される資料を蓄積することで、受講生は各自の授業のノートを作成することができるようになっている。

なお「ミクロ経済学」の教科書は、伊藤元重著『ミクロ経済学』日本評論社、1992刊、(2004年度からは、伊藤元重著『ミクロ経済学 第2版』日本評論社、2003刊を使用)「マクロ経済学」の教科書は、嶋村紘輝、他5名著『入門 マクロ経済学』中央経済社、1999刊を利用している。

2001年度の成績について

最終的な授業評価は、数回の小テスト、前期末、学年末試験の結果を総合的に判断して決定している。その結果は、表1-1：ミクロの成績、表1-2：マクロの成績にまとめられている。ミクロに関しては優(A)が36人、良(B)が54人、可(C)が81人、再履修の必要がある不可(D)が56人である。また割合については、Aが15.8%、Bが23.8%、Cが35.7%、Dが24.7%である。マクロに関してはAが47人、Bが61人、Cが67人、Dが52人。割合はAが20.7%、Bが26.9%、Cが29.5%、Dが22.9%である。マクロの成績の方がミクロよりも少し良いように思われる。マクロの方が現実経済により密着しているため、ミクロより理解しやすいのかもしれない。

表1-1 ミクロの成績

ミクロ	人数	割合
A	36	15.8
B	54	23.8
C	81	35.7
D	56	24.7
合計	227	100.0

表1-2 マクロの成績

マクロ	人数	割合
A	47	20.7
B	61	26.9
C	67	29.5
D	52	22.9
合計	227	100.0

次にミクロとマクロの成績の間に相関関係があるかどうかを調べてみる。その結果は、表1-3：ミクロ・マクロの成績相関にまとめられている。またAを4、Bを3、Cを2、Dを1として計算すると、ミクロとマクロの相関係数は0.799で、両者の相関が非常に高いことがわかる。

ミクロがAでマクロもAの学生が27人、ミクロがAでマクロがBの学生が8人、マクロがAでミクロがBの学生が18人、ミクロがBでマクロもBの学生が27人いる。つまり80人の学生がミクロ、マクロで少なくともAかBをとっていることになる、227人中の80人、約35%ということになる(第1グルー

プ)。一方ミクロ、マクロともにDの学生が41人、どちらかでDをとっている学生が67人いる。227人中の67人、約30%（第2グループ）。第1グループの学生は今後も適切な指導によって、もっとその経済学力を伸ばしていけるであろう。しかしながら、第2グループの学生については、少人数によるグループ学習やチューター制度の導入などによって、もっときめ細かい指導法を研究していく必要があると考えられる。

表1 - 3 ミクロ・マクロの成績相関

	ミクロA	ミクロB	ミクロC	ミクロD	小計
マクロA	27	18	2	0	47
マクロB	8	27	24	2	61
マクロC	1	9	44	13	67
マクロD	0	0	11	41	52
小計	36	54	81	56	227

相関係数 = 0.799

成績と入試種類別の関係については、表1 - 4：ミクロの成績と入試種類別、表1 - 5：マクロの成績と入試種類別にまとめている。これによるとミクロ・マクロの成績と入試種類別はあまり関係がなさそうに見える。経済学科では一般入試が一般入試A（一般A）と一般入試B（一般B）に、推薦入試が指定校推薦（指定）と公募推薦（推薦）に、また社会人・留学生などの特別入試（特別）和光高校の内部進学（内部）の6種類に区分される。留学生と和光高校の学生の成績が比較的良いのが目立つが、一般入試と推薦入試による成績の差はあまりみられないように思われる。しかしながらCやDを多くとっているのは一般Aのように見えるが、よりいっそう厳密な統計的分析が必要だと思われる。

表1 - 4 ミクロの成績と入試種類別

ミクロ	A	B	C	D	小計
一般A	11	23	44	34	112
一般B	3	3	10	3	19
指定	11	12	9	7	39
推薦	5	10	16	12	43
特別	3	3	0	0	6
内部	3	3	2	0	8
小計	36	54	81	56	227

表 1 - 5 マクロの成績と入試種類別

マクロ	A	B	C	D	小計
一般 A	13	27	38	34	112
一般 B	3	4	8	4	19
指 定	17	12	6	4	39
推 薦	5	16	12	10	43
特 別	4	1	1	0	6
内 部	5	1	2	0	8
小 計	47	61	67	52	227

2002年度の成績について

2002年度の最終評価の結果は、表 2 - 1 : ミクロの成績、表 2 - 2 : マクロの成績にまとめられている。ミクロに関しては優 (A) が36人、良 (B) が55人、可 (C) が76人、再履修の必要がある不可 (D) が55人である。また割合については、A が16.2%、B が24.8%、C が34.2%、D が24.8%である。マクロに関してはA が48人、B が60人、C が63人、D が51人。割合はA が21.6%、B が27.0%、C が28.4%、D が23.0%で、2001年度と比較しても成績に大きな相違はなさそうである。

表 2 - 1 ミクロの成績

ミクロ	人 数	割 合
A	36	16.2
B	55	24.8
C	76	34.2
D	55	24.8
合 計	222	100.0

表 2 - 2 マクロの成績

マクロ	人 数	割 合
A	48	21.6
B	60	27.0
C	63	28.4
D	51	23.0
合 計	222	100.0

次にミクロとマクロの成績の間に相関関係があるかどうかを調べてみる。その結果は、表 2 - 3 : ミクロ・マクロの成績相関にまとめられている。またAを4、Bを3、Cを2、Dを1として計算すると、ミクロとマクロの相関係数は0.734で、2001年度と同様に両者の相関が非常に高いことがわかる。

ミクロがAでマクロもAの学生が29人、ミクロがAでマクロがBの学生が7人、マクロがAでミクロがBの学生が11人、ミクロがBでマクロもBの学生が23人いる。つまり70人の学生がミクロ、マクロで少なくともAかBをとっていることになる、一方ミクロ、マクロともにDの学生が43人、どちらか

でDをとっている学生が63人いる。2001年度と比較しても大きな相違はなさそうである。

表2 - 3 ミクロ・マクロの成績相関

	ミクロA	ミクロB	ミクロC	ミクロD	小計
マクロA	29	11	7	1	48
マクロB	7	23	27	3	60
マクロC	0	19	36	8	63
マクロD	0	2	6	43	51
小計	36	55	76	55	222

相関係数 = 0.734

成績と入試種類別の関係については、表2 - 4：ミクロの成績と入試種類別、表2 - 5：マクロの成績と入試種類別にまとめてある。これによるとミクロ・マクロの成績と入試種類別はあまり関係がなさそうに見える。2002年度の経済学科では一般入試が一般入試A（一般A）と一般入試B（一般B）に、推薦入試が指定校推薦（指定）と公募推薦（推薦）に、また社会人・留

表2 - 4 ミクロの成績と入試種類別

ミクロ	A	B	C	D	小計
一般A	14	19	36	36	105
一般B	1	2	7	3	13
指定	15	12	10	5	42
推薦	1	20	20	10	51
特別	4	0	0	0	4
センター	1	2	3	1	7
小計	36	55	76	55	222

表2 - 5 マクロの成績と入試種類別

マクロ	A	B	C	D	小計
一般A	21	17	37	30	105
一般B	1	4	4	4	13
指定	15	17	5	5	42
推薦	7	18	16	10	51
特別	3	1	0	0	4
センター	1	3	1	2	7
小計	48	60	63	51	222

学生などの特別入試（特別）センター試験利用（センター）の6種類に区分されます。留学生の成績が非常に良いのが目立つが、一般入試と推薦入試による成績の差はあまりみられないように思われる。

2003年度の成績について

2003年度の最終評価の結果は、表3-1：ミクロの成績、表3-2：マクロの成績にまとめられている。ミクロに関しては優（A）が20人、良（B）が23人、可（C）が32人、再履修の必要がある不可（D）が27人である。また割合については、Aが19.6%、Bが22.5%、Cが31.4%、Dが26.5%である。マクロに関してはAが24人、Bが25人、Cが22人、Dが31人。割合はAが23.5%、Bが24.5%、Cが21.6%、Dが30.4%で、2001年度、2002年度と比較しても成績に大きな相違はなさそうである。

表3-1 ミクロの成績

ミクロ	人数	割合
A	20	19.6
B	23	22.5
C	32	31.4
D	27	26.5
合計	102	100.0

表3-2 マクロの成績

マクロ	人数	割合
A	24	23.5
B	25	24.5
C	22	21.6
D	31	30.4
合計	102	100.0

次にミクロとマクロの成績の間に相関関係があるかどうかを調べてみる。その結果は、ミクロ・マクロの成績相関にまとめられている。またAを4、Bを3、Cを2、Dを1として計算すると、ミクロとマクロの相関係数は0.734で、2001年度、2002年度と同様に両者の相関が非常に高いことがわかる。

ミクロがAでマクロもAの学生が17人、ミクロがAでマクロがBの学生が

表3-3 ミクロ・マクロの成績相関

	ミクロA	ミクロB	ミクロC	ミクロD	小計
マクロA	17	3	0	0	20
マクロB	6	13	4	0	23
マクロC	1	9	15	7	32
マクロD	0	0	3	24	27
小計	24	25	22	31	102

相関係数 = 0.734

3人、マクロがAでミクロがBの学生が6人、ミクロがBでマクロもBの学生が13人いる。つまり39人の学生がミクロ、マクロで少なくともAかBをとっていることになる、一方ミクロ、マクロともにDの学生が24人、どちらかでDをとっている学生が34人いる。2001年度2002年度と比較しても割合としては大きな相違はなさそうである。

ミクロの成績と入試種類別

成績と入試種類別の関係については、ミクロの成績と入試種類別、マクロの成績と入試種類別にまとめてある。これによるとミクロ・マクロの成績と入試種類別はあまり関係がなさそうに見える。2003年度の経済学科では一般入試、推薦制(指定校推薦と公募推薦を含む)、センター試験(センター試験AとBを含む)、経済学部総合入試、および特別選考制(社会人・留学生などの特別入試)の5種類に区分される。今年度も昨年度に引き続いて留学生の成績が非常に良いのが目立つが、一般入試と推薦制入試による成績の差はあまりみられないように思われる。

表3-4 ミクロの成績と入試種類別

ミクロ	A	B	C	D	合計
一般入試	8	9	13	16	46
推薦制	5	10	15	7	37
センター試験	3	3	1	1	8
経済学部総合入試	1	1	2	2	6
特別選考制	3	0	1	1	5
	20	23	32	27	102

表3-5 マクロの成績と入試種類別

マクロ	A	B	C	D	合計
一般入試	9	7	14	16	46
推薦制	8	13	5	11	37
センター試験	3	2	2	1	8
経済学部総合入試	1	2	1	2	6
特別選考制	3	1	0	1	5
	24	25	22	31	102

ミクロ・マクロと数学の成績

本学経済学科新入生のほとんどの学生は、高校時代は私立大学の文化系学

部を目指す、いわゆる「私立・文化系」に属し、高校での数学をあまり勉強していない。数式の展開やグラフの作図などが苦手な学生が多いのが現状である。そこで経済学科では、高校の数学の復習をしたうえで、経済学を勉強するために必要な数学の授業を強化することとし、2003年度より従来の「経済数学」の授業を「経済学のための数学入門」と改め選択専門科目として設置した。この授業は筆者が担当している。

「経済学のための数学入門（以下数学）」が目指すのは、高校までの数学の授業の復習とミクロ・マクロを理解する上で必要な数学の知識を学ぶことである。ミクロにおいて重要なことは経済学における「限界（Marginal）」概念の理解に不可欠な関数や微分の復習である。現代経済学において「微分」の知識無しで限界概念を理解することは不可能であろう。実際の授業で興味深いことは、限界概念をどうやら理解できたときに、それが高校時代に学んだ関数や微分に関係しているということに気づいて驚く学生が多いことである。ここでやっと数学の知識の必要性に気がつくわけである。またミクロにおいては、需要・供給曲線で代表されるような関数やグラフの理解がとりわけ必要である。二次平面で表される一次関数や二次関数のグラフの書き方、操作などの理解と練習が必要になる。マクロにおいては連立方程式体系の理解が最も重要である。ケインズの45度線理論から始まって、IS-LM、AD-AS体系などすべて連立方程式体系として表されるからである。

「経済学のための数学入門」の授業研究については稿を改めて報告することとし、本稿では「数学」の成績とミクロ・マクロの成績相関について報告する。新入生102人の内「数学」の授業を選択したのは43人である。その内、優（A）が12人、良（B）が6人、可（C）が11人、不可（D）が14人。授業の評価は小テスト5回と学期末、学年末試験の成績を総合評価している。

下の表4-1、表4-2に示されているように、数学がAでミクロもAの

表4-1 ミクロ・数学の成績相関

		ミクロ				
		A	B	C	D	合計
数学	A	11	1	0	0	12
	B	1	3	2	0	6
	C	0	1	7	3	11
	D	0	1	7	6	14
	合計	12	6	16	9	43

相関係数 = 0.842

表4 - 2 マクロ・数学の成績相関

		マクロ				
		A	B	C	D	合計
数学	A	9	3	0	0	12
	B	2	3	1	0	6
	C	0	2	6	3	11
	D	0	3	3	8	14
	合計	11	11	10	11	43

相関係数 = 0.786

学生が11人、数学がAでミクロがBの学生が1人、数学がBでミクロがAの学生が1人、数学がBでミクロもBの学生が3人である。数学とミクロの成績の相関係数は0.842と非常に高くなっている。つまり数学の理解がミクロの理解を大きく助けているといえる。

数学がAでマクロもAの学生が9人、数学がAでマクロがBの学生が3人、数学がBでマクロがAの学生が2人、数学がBでマクロもBの学生が3人である。数学とミクロの成績の相関係数は0.786で数学とミクロの相関よりは低いものかなり高いといえる。

上記のことから、数学の授業はミクロ・マクロを学ぶ上で非常に重要であるということがわかる。2003年度は数学を履修した学生も少なく、標本数不足の感は否めないが、数学の成績のよい学生はミクロ・マクロの成績もよいということは断言できる。今後は経済学科としては高校数学の補習および数学の授業の必修化を目指すべきである。

結びと提言

上記のような2001年度から2003年度の経験から導かれる、授業に対する提言は以下の通りである。

1. 毎回与えられる宿題のように、復習を目的とする教材は学習の理解を深める上で非常に有効だと思われる。
2. パワーポイントなどの視覚教材を利用するのは非常に有効だと思われる。しかしながら授業中に、資料として教材を配布するのが望ましい。また視覚教材を十分に駆使できるような施設のさらなる充実が必要である。
3. クラスの学生数はあまり多くない方が良さそうで、教師が学生を把握できる100人程度が適切であると思われる。2003年度から取り入れた2クラ

ス制は十分に効果を上げているといえる。

- 4．授業時間以外に、さらに少人数のグループに分けて問題演習や質問に答える時間を確保し、またチューター制の導入なども必要だと思われる。さらにはインターネットを使った質問のやりとりや宿題の提出などを行えるようにできれば良いと思われる。
- 5．半期ごとに授業が完結する方式（前期ミクロ、後期マクロ）が有効ではないかと思われる。というのは通年授業ではあまりにも長すぎると思われるからである。
- 6．入試種類別と成績にはあまり強い関係はなさそうである。どのような入試形態であろうとも、入学後の学習意欲がもっとも成績に強い影響を与えているようである。つまり入学後の学習意欲を高めるような指導が必要である。ミクロ・マクロともに推薦制で入学した学生のDの比率が低いことは注目に値すると思われる。
- 7．ミクロ・マクロ・数学でAAAをとる学生の数が多いという事実を真剣に受け止めて、優秀で学習意欲のある学生をさらにのばせるようなシステム作りが必要である。
- 8．さらに教育内容の充実を図って、「GP」へ応募できるような体制作りが必要である。
- 9．経済学検定試験（ERE）受験のような学習目標を持たせる。（「経済学教育研究会」ではすでにERE対策講座を実施している。）

パワーポイントを使用した授業例

2003年度に授業で使用したミクロとマクロの配付資料を参考にして、授業の展開を説明してみる。図1-1および図2-1がプロジェクターでスクリーンに映し出される画面である。画面はパワーポイントのアニメーション効果を使って、一行一行左から映し出していき、特に図については黒板に板書する要領でアニメーション効果を使って一本一本描いていく。色彩的な効果を使って視覚に訴えることもできるし、実際にペンタブレットを使用して、文字や記号などを書き込んで板書する感覚で授業を進めている。ほとんど黒板を使用している感覚で授業可能である。図1-2および図2-2は事前に学生に配付する資料で、所々に空欄が作っており、授業の進行にしたがって各自が空欄を埋めて自分のノートを完成させていく。（レーザーポインターの使用よりペンタブレットの方が効果的である。）

ミクロとマクロの授業では毎回16枚のスライドを使用している。4枚のスライドを1枚のB5用紙に割り付け印刷し、合計4枚のB5用紙を1枚のB4用紙に両面印刷して、毎回の授業の資料が順序よく並ぶように配置しており、通年すると1冊の授業ノートが完成することになる。

図 1 - 1 マクロの授業でスクリーンに映される映像の一部

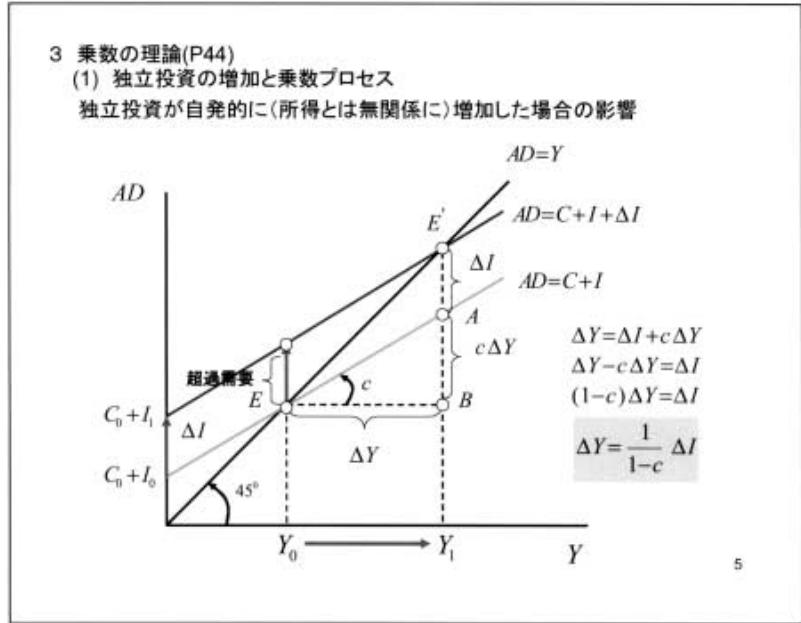


図 1 - 2 マクロの授業前に学生に配布される資料の一部

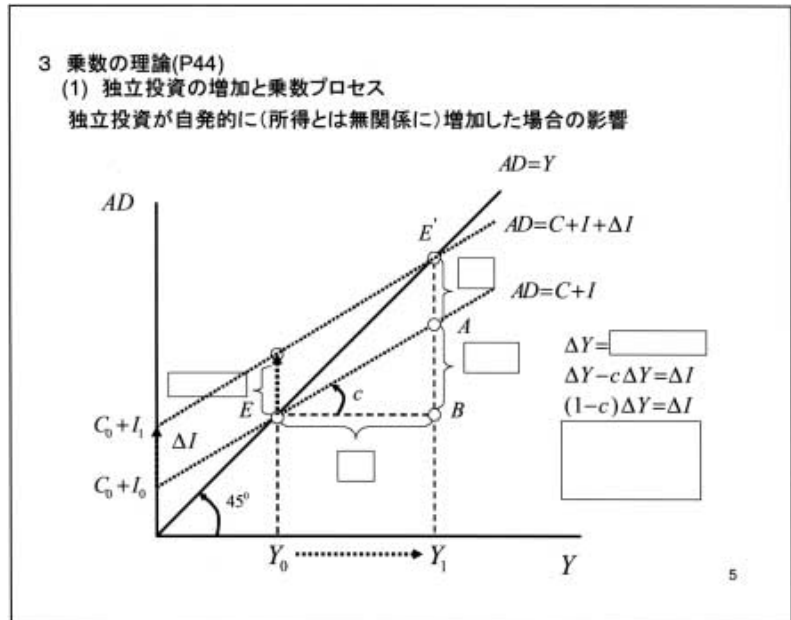


図2 - 1 ミクロの授業でスクリーンに映される映像の一部

Ⅲ 利潤極大化行動と供給曲線(P76)

完全競争の条件

- ① 企業は同質の財貨を生産している
- ② 多数の企業が存在して、個々の取引量は小さい
- ③ 行動を決定する際に、他の企業への影響を考慮しない
- ④ 企業は財や市場価格について完全な情報を持っている
- ⑤ 市場への参入離脱の自由がある

完全競争市場においては、企業は市場価格を所与として需給量を決定する
これは、市場全体の取引量に比べ、個々の買手・売手の取引量が小さいから
上記のように、価格を所与として行動する経済主体を
価格受容者、プライス・テイカー (price taker) と呼ぶ
つまり、プライ・テイカーとして行動する多数の経済主体からなる市場
の状況を完全競争 (perfect competition) と呼ぶ

5

図2 - 2 ミクロの授業前に学生に配布される資料の一部

Ⅲ 利潤極大化行動と供給曲線(P76)

完全競争の条件

- ① 企業は を生産している
- ② の企業が存在して、個々の取引量は小さい
- ③ 行動を決定する際に、他の を考慮しない
- ④ 企業は財や市場価格について を持っている
- ⑤ 市場への の自由がある

完全競争市場においては、企業は市場価格を として需給量を決定する
これは、市場全体の取引量に比べ、個々の買手・売手の取引量が小さいから
上記のように、 として行動する経済主体を
価格受容者、 (price taker) と呼ぶ
つまり、プライ・テイカーとして行動する多数の経済主体からなる市場
の状況を (perfect competition) と呼ぶ

5